研究成果　夏秋イチゴの「株据置作型」の開発

【はじめに】

夏秋イチゴの夏植作型は，春植作型の収量が低下する8～9月出荷を補完する重要な作型である。

しかし，育苗や定植作業が春植作型の栽培管理と競合することから，この作型を導入できる面積が制限されている。

そこで，夏植作型の生産終了株を翌年の生産株としてそのまま利用し，通常の夏植作型と同等の収量を得るための管理方法（2年目の液肥開始時期及び腋芽仕立時のクラウン径）について検討した。

【試験方法】

栽培試験は2011～2012年に旧三好分場(標高約200m)にて実施した。据置株には前年の7月上旬に定植し，収穫を終えた夏植作型の越冬株を用いた。越冬中は無加温ハウス内で灌水のみを行った。

現地実証試験は2013年に東みよし町水ノ丸(標高約950m)にて実施した。据置株には前年の6月下旬に定植し，収穫を終えた夏植作型の越冬株を用いた。越冬中はハウスのビニル被覆を除去し，自然状態で放置した。

両試験とも品種はサマーアミーゴ，栽培方式はとこはる方式を用いた。腋芽は5月下旬～6月上旬にクラウン径を測定し，1株あたり3芽に仕立てた。

【試験結果】

株据置作型における定植2年目の収量は，クラウン径の大きい腋芽を仕立てた区ほど多かった（図1）。また，液肥は6月上～中旬に開始した区で収量が多かった（図 2）。6 月下旬では収穫開始が遅

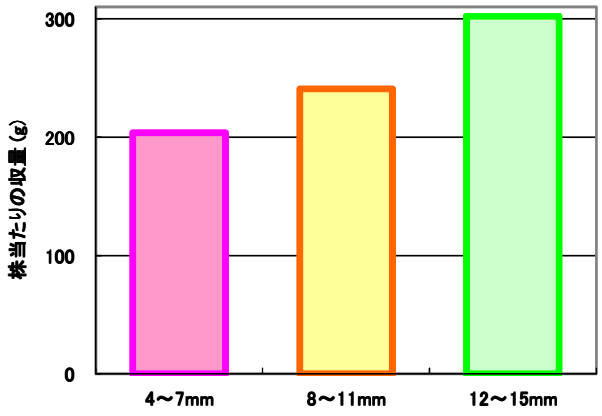


図1　腋芽仕立時のクラウン径と収量の関係

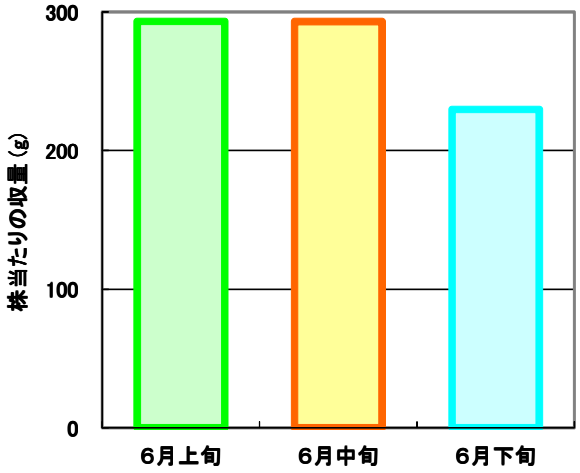


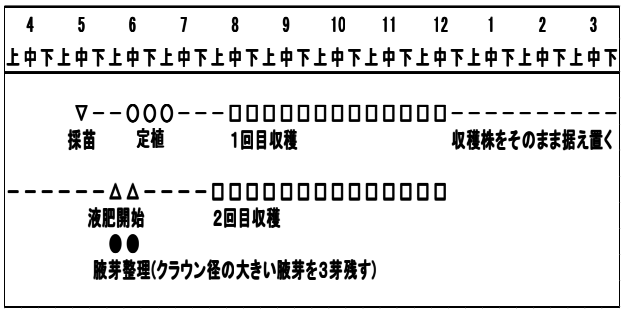
図2　液肥開始時期と収量の関係

れ，そのことが収量の低下につながったと考えられた。

上記の管理方法を現地で実証したところ，株据置作型の収量は夏植作型と同等の約200g/株以上であった。また，果実の大きさや硬度に差はみられなかった（データ省略）。

以上から，夏植作型の生産終了株を次年度の生産株として利用する「株据置作型」は，普及可能な技術であると考えられた（表1）。

表1　開発した株据置作型



【おわりに】

活用に当たっては以下の点に注意すること。

1. 病害のおそれのあるほ場では実施しない。
2. 夏植作型終了後から液肥開始までは必要に応じて灌水のみ行う。
3. 据置株が越冬中に枯死し，欠株がでた場合は前年の秋苗を5月中旬に補植する。

（農産園芸研究課 野菜・花き担当 鈴江 康文）